

子どもの村福岡訪問 報告書

訪問日：2023年12月15日

関西学院大学法学部 山口亮子ゼミ 4年生一同



目次

子どもの村福岡とは

- ・ 設立背景
- ・ 日本で里親を増やすには

SOS子どもの村福岡 主な活動

- ・ 里親・里子支援
- ・ ショートステイ

子どもの村福岡とは



設立背景①

～SOS子どもの村とは～

世界最大のNGOで、子どもの権利条約に基づきあらゆる困難に直面する子どもを支援する組織

オーストリアでは第二次世界大戦の影響で戦災孤児が社会問題となっていた。彼らの惨状を見て、創設者ヘルマン・グマイナー氏は「子どもたちがそれぞれの家庭を持たない限り、問題は解決しない」と考えた。そこで、オーストリア・イムスト村に夫を亡くした未亡人に親となってもらい孤児たちと家庭を築く仕組みを作ったことで、1949年、世界初のSOS子どもの村が誕生した。今日ではその活動が世界に広まり、家庭養護などの方法で子どもたちを支援している。

設立背景②

世界の潮流は家庭養育 家庭で暮らす子どもの権利

<基本的信頼感の獲得>

愛着（アタッチメント）は人間関係の土台。「自分は守られる存在だ」と信じられる経験が子どもの自己肯定感、自尊心を育む。

<親や家庭のモデルを学ぶ>

- ・ 生活スタイル
- ・ 文化、風習
- ・ 親族、地域社会の交流が重要

成立背景③

～なぜ福岡に？～

2004年頃、福岡市では一時保護の子どもが急増。
預かり施設が不足する事態に。



施設ではなく、里親を増やせば良いのでは？
官民協働で子どもたちの支援へ

日本で里親を増やすには？

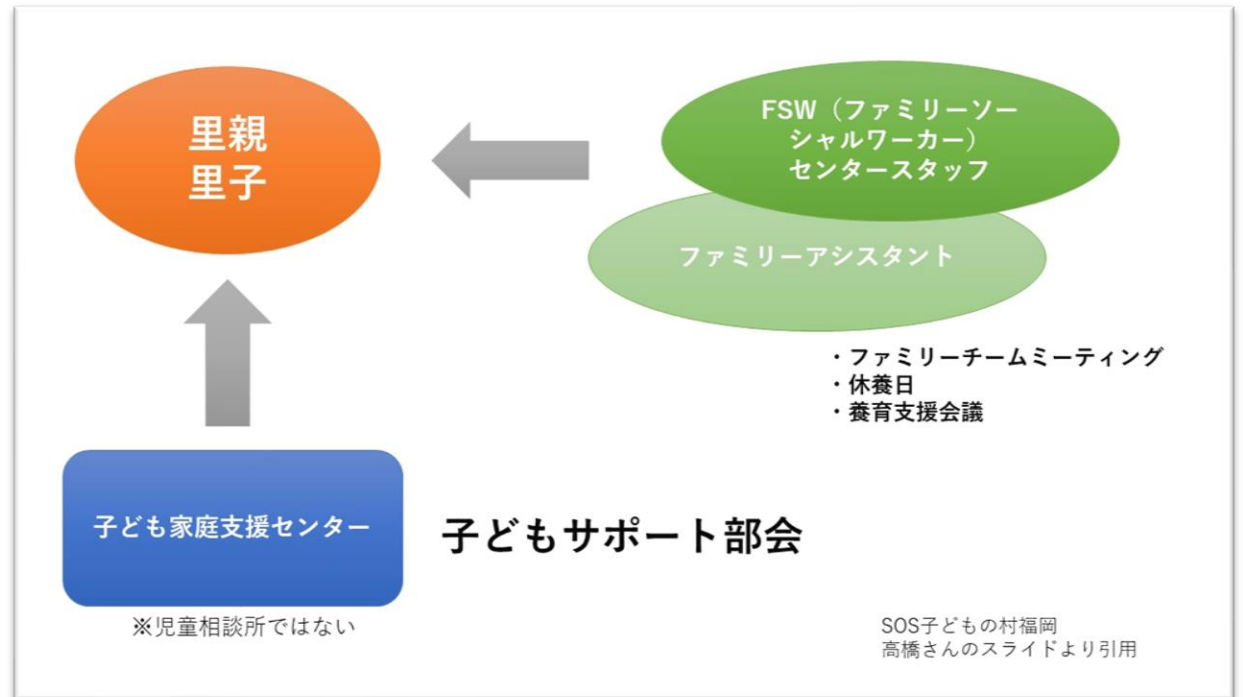
日本でなぜ里親が増えないのか

- ・ 地域で里親制度が知られていないので孤軍奮闘していた



NPOのネットワークで
里親普及！

<子どもの村の仕組み>



スライド13でも説明あり！

SOS子どもの村JAPAN の主な活動



見えてきたもの

1. 家庭で育つのは当たり前
2. 家庭の文化や家庭運営は家庭で学ぶ
3. 家庭以外のコミュニケーションが子どもをケアする

子ども家庭支援センターから見えてきたもの

1. 子どもだけに問題があることはない
2. 複雑で重層的な問題を抱える家族の存在
3. 家庭は地域のほんの小さなつながりに支えられている

様々な理由で家族と暮らせない子どもたちを迎えて、育親（子どもの村特有の呼称で里親のこと）とともに家庭を作り、専門家のもと、地域とともに育てる。また、子育てに支援が必要な家庭に向け、ショートステイ専用ハウスを運用している。

- 里親・里子支援
- ショートステイ（一時保護事業）
- ヤングケアラー相談窓口
- 地域の家族の相談
など



ファミリーチームミーティング

毎月2回、子どもの村で家庭ごとに行う。育親、ファミリーアシスタント、ファミリーソーシャルワーカー、村長が参加し、日頃の養育の悩みや課題を共有し、チームで話し合ったり対応法を考えたりする。

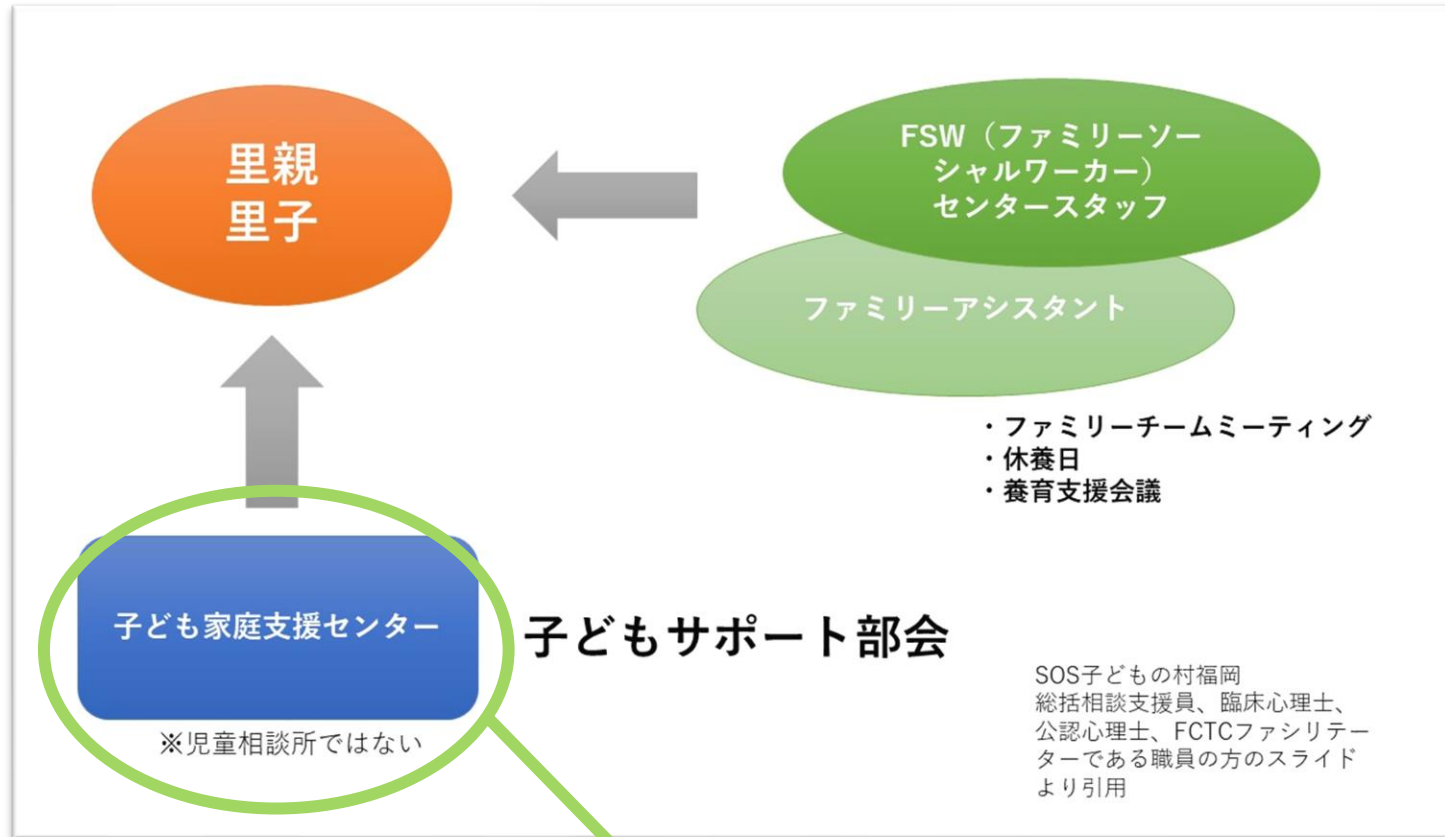
養育支援会議

年に2回実施。上記メンバーに加えて、子ども家庭支援センターの臨床心理士や、子どもの担当セラピストも参加し、子ども一人一人に対して、1年間の養育方針や児童相談所との連携の仕方について話し合う。

	ファミリーサポート	ショートステイ協力家庭	ショートステイ里親	養育里親	養子縁組里親
預かり期間	数時間	1泊～最大2週間	1泊～最大2週間	短期～18歳まで (場合によっては20歳や大学卒業まで)	成立後は一生涯家族
登録までに必要な期間	・3日程度の研修 ・保育士/看護師/養育里親認定等あれば研修一部免除あり	・各自治体の研修 ・保育士/看護師/養育里親認定等があれば研修一部免除あり	養育里親の研修が必要	養育里親の研修が必要	養育里親の研修 + 民間団体独自の研修があるところが多い
申し込み窓口	市区町村の子育て支援課	市区町村の子育て支援課	市区町村の子育て支援課	児童相談所	児童相談所/ 民間の縁組斡旋団体
申し込む人	保護者	保護者	保護者	児童相談所 (保護されてから利用)	児童相談所 (保護されてから利用)

SOS子どもの村では、育親希望者はまずファミリーアシスタントとして経験を積む

里親・里子支援



左図の支援モデルだけでなく、実親との連携、地域の子どもとして育てる取り組み、市民・企業・行政が一体となったネットワークによって子供たちの支援を行う。

スライド7の図 再掲

福岡市の委託で開設された相談機関

里親を募る上での困難

- ・年齢が上がると引き受けることができる里親が少なくなる

→子どもが思春期に入ること、親子関係の構築はより難しくなる

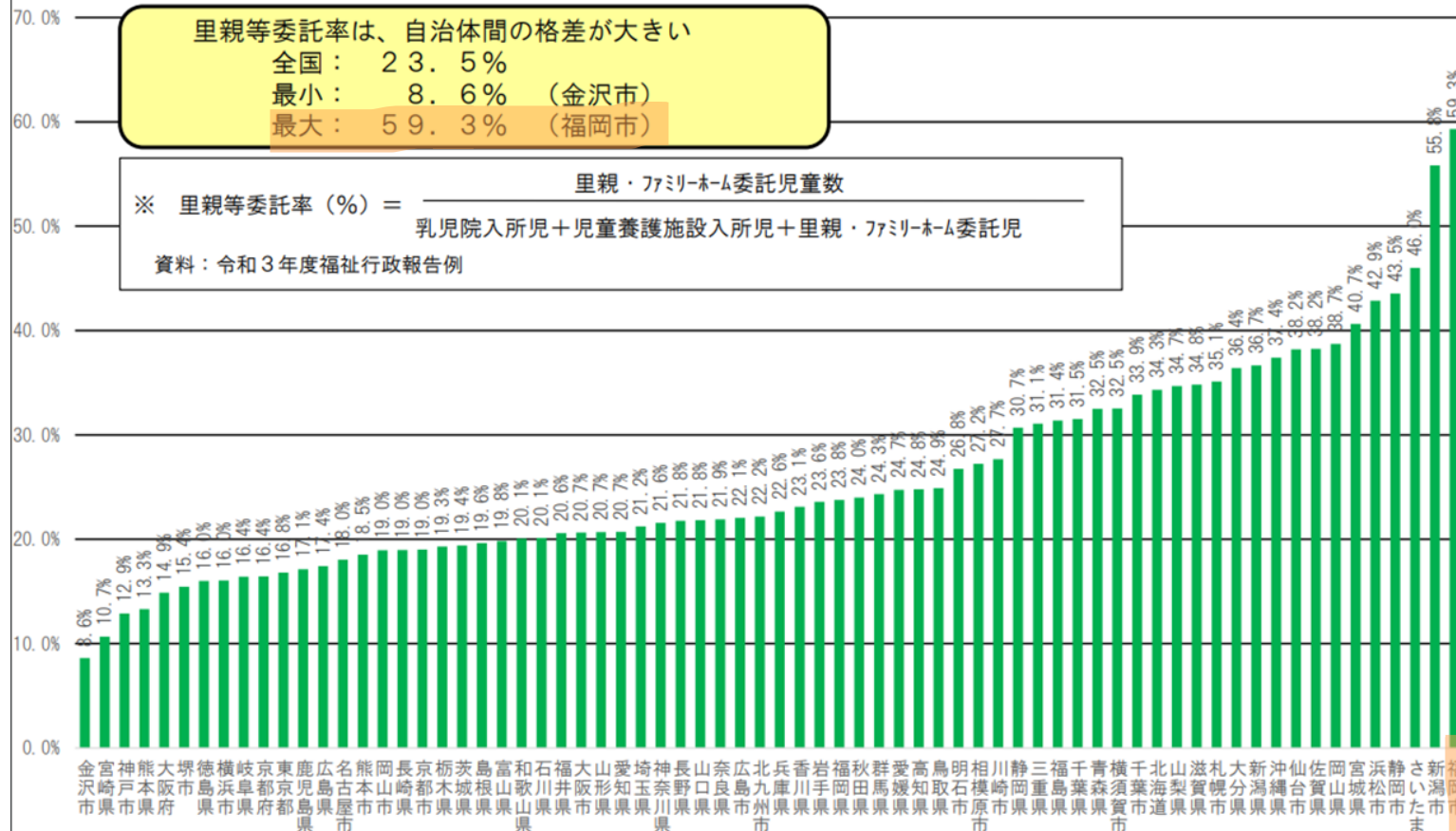
- ・きょうだいがいる場合

→きょうだいで育つことが大切であるが、きょうだい数が多いと里親家庭と一緒にみるのは困難になることもある

福岡市は里親委託率 1 位

(3) 都道府県市別の里親等委託率の差

70 都道府県市別里親等委託率 (令和3年度末)



福岡市は里親等委託率が全国1位となっている。子どもの村福岡のようなNPOや関係機関と行政が連携して取り組んだことにより委託率1位に繋がっていると考えられる。

里親の種類

厚生労働省HPより

養育里親	専門里親	養子縁組を希望する里親	親族里親
さまざまな事情により家族と暮らせない子どもを一定期間、自分の家庭で養育する里親です。	養育里親のうち、虐待、非行、障害などの理由により専門的な援助を必要とする子どもを養育する里親です。	養子縁組によって、子どもの養親となることを希望する里親です。	実親が死亡、行方不明などにより養育できない場合に、祖父母などの親族が子どもを養育する里親です。

※専門里親は少数

里親を希望する人は？

【里親手当（子ども1人当たり）】

養育里親 月額90,000円

専門里親 月額14,100円



里親になると里親手当が給付されるが、制度の悪用を防ぐ為、里親となるには要件を満たしていることと、欠格事由に該当しないことが求められる。里親となる人は夫婦や子育てが終わった人に限らず、シングルの方や元保育士の方など、バックボーンは様々である。

ショートステイ

児童の養育が一時的に困難となった場合、又は育児不安や育児疲れ、慢性疾患児の看病疲れ等の身体的・精神的負担の軽減が必要な場合に、児童を一時的に預かる事業。短期入所生活援助事業とも。

ショートステイを利用する主な理由としては、半数以上は**育児疲れ**。

<育児疲れの原因>

- ・ 親に精神障害、身体障害、疾患等がある
- ・ 多子家庭（子供が3人以上）
- ・ 発達障害等、子どもの特性的影響
- ・ 若年親の育児スキル不足

ショートステイの需要は年々拡大している

ショートステイ枠が足りないときは

子どもの村福岡ではショートステイ依頼の3割を断らなければならない状況にある。

→受け入れる数をオーバーしても子どもや家庭の背景を考慮して受け入れたり。家庭の緊急性を考慮して受け入れることもある

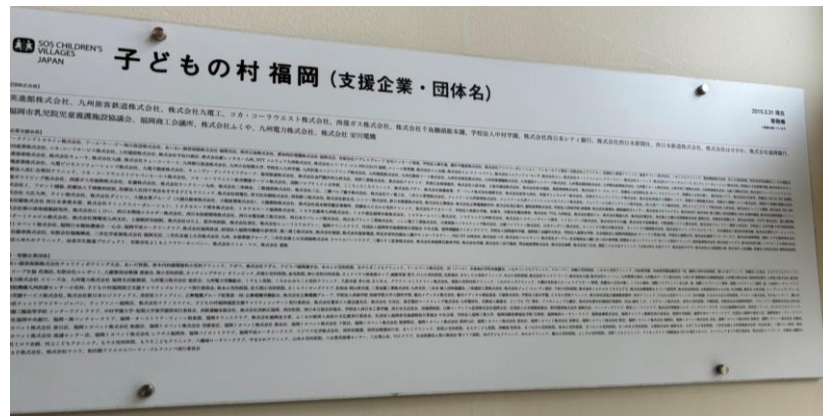
ニーズの天井は

現在もショートステイ利用者・希望者ともに増加しており、ニーズの天井が見えない現状。

ショートステイ専用ハウス

子どもの村福岡の敷地内には5件のショートステイ専用ハウスがある。うち3件が里親里子専用、2件がショートステイ専用となっている。

企業・団体の支援により建てられており、当初は4件分の支援しか集まらなかったが、福岡市内の小児科医たちの支援により無事もう1件を建てることができたそう。



←本部内にある支援企業・団体の名簿

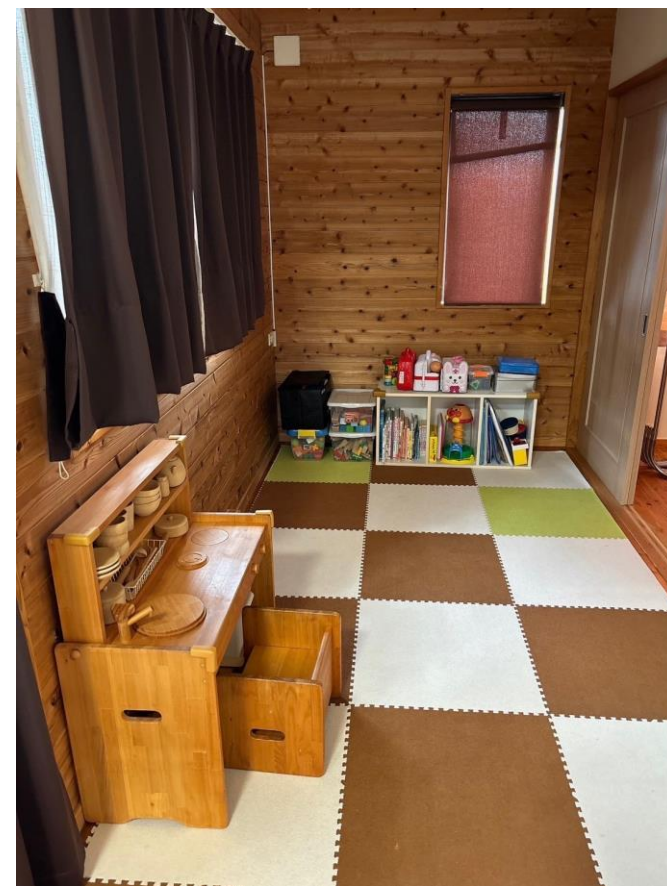
ショートステイ専用 ハウスの中の様子



子どもの遊ぶスペースが十分に確保されているほか、リビングと直接つながっているので子供を見守ることができる

家具・家電が完備されており、すぐに生活することが可能

家具の角には体をぶつけた時でも大丈夫なようにクッションが付けられている
テレビの近くには子ども向け番組の案内も



全体的に木調で
安心感のあるつくり

気軽に利用してもいいのか

ショートステイはサービスの1つであるので、気軽に利用しても良い。疲れを我慢した結果、子どもに悪い影響を与えてしまうことの方が問題となる。育児疲れによりボロボロになっていた母親が、ショートステイを終えた子どもを迎えに来たときには、服装・化粧を整えて回復することが出来ていたそう。

利用することで子どもに悪影響はあるのか（孤独感など）

祖父母や親戚の家に預けられる感覚の子どもたちもいる。

子どもの村にいる子どもたち同士の関係性

大きな問題がおきたことはないが、配慮が必要な子どもがいる時には、中庭で遊ぶ時などに子ども同士が一緒にならないよう工夫が必要なこともある。

受講生の意見・感想

- 2023年12月15日(金)、山口ゼミのフィールドワークとして特定非営利活動法人SOS子どもの村JAPANが運営する「子どもの村福岡」に訪問させていただいた。本報告書は施設訪問後に開催された勉強会時に出たゼミ生の感想をまとめたものである。ただし、ゼミ生の名前は個人情報保護の観点から全てイニシャルで記載する。

(M.S)

これまで大学における学習に際しては法律から、特に子どもの権利ばかりを見てきたが、実際に現場の声を聞いたり現状を知ったりした事で、法律という文面や司法の制度自体ばかりに目を向けるのではなく、より多角的に、各方面の立場を考慮して社会課題に対する見解を論じていく必要があると感じた。

(M.H)

里親制度等に関して資料上でしか把握していなかったため、施設見学は新鮮であった。また、司法権の介入により里親、子どもの両者に好ましくない影響が出ないように考える必要があるという現状を知り、そうした当事者視点が自身には足りていなかったのだと気づく機会にもなった。

(Y.H)

支援を行うには根強い取り組み・運営努力が必須であり、「子どもの村福岡」が20年弱かけて現在のような体制を築き上げたのだと思うと、日本全体にこのような活動・運営方針が浸透していく事はまだまだ先なのかなとも感じてしまった。また、行政・民間片方みではなく官民協働にだからこそできる支援範囲の広さを実感した。そのため、今回お話いただいた内容等を大学からの対外的な発信を通して少しでも世間に広がればと思っている。

(S.I)

里親制度やショートステイ等に関する考え方の風向きが変わってきている事を実際に施設見学をさせていただく中で感じた。今回のフィールドワーク内容を周りに共有したり、家庭を持った友人と話す中で制度の提案をしたり等して情報を広げていけば救われる子どもが必ずいるはずであり、子どもだけでなく親にも優しい世の中に近づくのではないかと思った。

(A.G)

支援に際しては行政と民間が一緒になって協力し取り組みを行っていく事の重要性を実感した。里親制度のみでなく、他の社会課題においてもそうした官民協働により相乗効果が生まれるような体制が普及し、支援の仕組みが整えられるよう願っている。

(K.H)

1番印象に残っているお話は短期利用(ショートステイ)と長期利用(里子)の子たち間の関わり方だ。お互いに「子どもの村」にいる背景を理解しつつ、一般家庭の子どもたちが公園で一緒に遊ぶようなフランクな関係を築けていると知り、驚いたと同時に良い雰囲気・環境があるのだと感じた。また、制度を「気楽に利用して良いよ」というスタンスでいらっしやる事はとても素晴らしい取り組みだとも感じたので、こうした取り組みや情報がもっと世間に広がっていけば良いなと思った。

(N.Y)

今回のフィールドワークを行う事が決定してから児童養護施設以外の子どもの施設(子どもの村福岡)の存在を知り、フィールドワーク中も新しく得るものばかりであったため、今後も情報を選び好みせず何でも積極的に受け入れ学んでみたい、という気持ちが強くなった。

(K.Y)

「子どもの村」の外観・内観が良い意味で施設感がなく、子どもたちはごく普通に家庭の一員として過ごせているのだと感じた。また、家はもちろん庭にある枕木といった部分まで様々な企業や個人からの寄付金・協力によって成り立っていると知り、支援というものは沢山の人の助けを受けながら行われていくべきものなのだと感じた。また、他のゼミ生が職員の方に対し積極的に質問する姿を見て刺激になった。今後はより一層アンテナを張って様々な事を吸収していきたい。

(M.Y)

「サービスの一環だから」「辛くなる前に来て」という職員の方のお言葉が、「疲れたら休んでも良いよ」って言ってもらえているようで、将来家庭を持ちたい自身にとって心の支えとなった。今後は里親と里子が共に成長できる環境が増え、社会(世界)が掲げる目標に寄り添えられる日本になれば良いなと感じたと同時に、自身も積極的に支援側に回っていけるようになりたいという思いが生じた。

(K.M)

事前に学習していた事もあり、理解していたつもりでいたが、実際に足を運ぶ事で、テキスト上では分からないところが沢山見えてきた。里親と過ごす中で初めて一般の家庭の感覚を知った子どもたちが過去に漏らした言葉を知った時には、自身にとっての当たり前は決してすべての子どもたちに当てはまる事ではないのだと実感した。また、小児科医の先生方が協力し合って寄付金を募りお家を建てる事ができたというお話を伺い、個々人の力でも動ける事はあるなと思った。

(K.S)

これまで子どもと福祉に関する授業を履修し学びを深めてはきたが、実際にどういった環境で子どもたちが暮らしているのか等現場に足を運ぶからこそ知る事ができる情報が多々あった。1番印象的であったのは「家庭の文化や風習は家で育つからこそ自然に学べる」というお話。自身が自然に備わってきたものは当たり前のように当たり前ではないのだと実感し、考えさせられるものが多かった。また、官民の積極的な協力体制は福岡市のみで終わるのではなく、他の市町村にも普及していくべきだと感じた。

おわりに

総じて、「現場で実際にお話を伺うからこそ得られるものがあった」「支援を継続的に行うためには多くの人との協力が必要だと実感した」「社会課題に対し多角的な視点を持って考える事が大切、当たり前ではないのだと気づいた」といった意見が多かった。こうして私たちに新しい学びと気づきを提供してくださった「子どもの村福岡」の方々には改めて深くお礼を申し上げたい。

また、ゼミ生一同、今回の経験をここで終わりにするのではなく、各々の研究に繋げ、更には、対外的に発信する等して、一人でも多くの子どもたちが家庭の中で自らの未来をかたちづくる事ができるよう貢献していきたい。



ありがとうございました

参考文献

- ・ SOS子どもの村JAPAN 公式HP <https://www.sosjapan.org/> (最終閲覧日：2024/01/26)
- ・ SOS子どもの村JAPAN (n.d.) 「すべての子どもに愛ある家庭を」パンフレット
- ・ SOS子どもの村JAPAN(2022) 「ANNUAL REPORT 2022」パンフレット
- ・ 親子を支えるショートステイ里親info 「ショートステイ里親とは」 <https://www.shortstay-satooya.jp/shortstay/index.html> (最終閲覧日：2024/01/14)
- ・ 厚生労働省 (n.d.) 「広報誌『厚生労働』」
https://www.mhlw.go.jp/houdou_kouhou/kouhou_shuppan/magazine/2016/10_02.html (閲覧日：2024/01/14)
- ・ 公益財団法人全国里親会 (n.d.) 「里親の種類と要件」 https://www.zensato.or.jp/know/s_kind (最終閲覧日：2024/01/23)
- ・ こども家庭庁HP掲載資料 (n.d.) 「関係資料集 施設入所児童数の推移」
https://www.zensato.or.jp/know/s_kind (最終閲覧日：2024/01/14)